

学科・資格 社会学科・特任教授

申請者氏名 後藤 範章

研究課題		視覚/映像社会学とビジュアル・リサーチ・メソッドに関する研究 (16)
報告の概要	研究目的 および 研究概要	<p>近年、我が国でも Visual Sociology への関心が高まり、研究成果も蓄積されるようになってきた。しかしながら、Visual Sociology を「映像社会学」と表現する研究者と「視覚社会学」と表現する研究者との間には、大きな溝が横たわっている。大雑把に言えば、前者は映像/画像データ（ないしメディア）を用いた“方法としての「映像」社会学”が、後者は「見る/見える」営みや経験そのものをテーマ化する“対象としての「視覚」社会学”が、それぞれ含意されている。本研究は、両者の溝を埋め（私は「ビジュアル社会学」と呼称する）、我が国における「実質的な Visual Sociology 事始め」を宣言して、研究を継続し成果を積み上げるものである。</p> <p>2021年度までの成果をリレーして、16年目の研究として実施した。</p>
	研究の結果	<p>私は、1994年度より研究室で学生と共に“写真で語る：「東京」の社会学”と題するプロジェクトに取り組んでおり、その中から「集合的写真観察法」と呼ぶ新しいビジュアル調査法を開発し実践を積み重ねている。プロジェクトの成果に関しては、学内での展示発表やウェブでの公開の他に、学会発表・講演や論文なども既に多数発表している。こうした蓄積を土台にして、日本より20年程先に進んでいる欧米の Visual Sociology Movement の成果をレビューして吸収しつつ、当研究室のプロジェクトの成果をそうした研究史の中に位置づけて、共通性と特異性を明確にし、独自の「ビジュアル社会学」の構築を進めている。</p> <p>本年度は、上記プロジェクトによる成果を、コロナ禍ゆえに2020・21年度と同様の特設サイト (Online) で発表すると共に、文理学部を会場として3年ぶりになる対面での発表会を開催することができた。</p> <p>静止画（写真）と動画による社会学的研究がさらに進展した。</p>
	研究の考察・反省	<p>ビジュアル社会学ないしビジュアル調査法に関する研究成果が着実に蓄積され、学部及び大学院での社会学及び社会調査教育の場面でも定着するようになると同時に、学会での認知度と評価が格段に上がっている。関連する出版物も多く見られるようになってきた。</p> <p>本プロジェクトの成果を基にした「写真観察法」を含む社会調査の教科書（共編著『新・社会調査へのアプローチ』ミネルヴァ書房）の全面改訂版を2023年秋までに出版することになっており、これまでの「写真観察法—ビジュアル調査をやってみよう—」を「ビジュアル調査法—写真観察と映像フィールドワーク—」と改題した改訂稿を出版社に入稿済みである。ビジュアル調査法が社会調査の一方法として確立しつつある証左でもある。</p>
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	<p>1)2022年12月18日、第29回“写真で語る：「東京」の社会学”展【メインテーマ：「東京」の地下空間—地下と地上との合わせ鏡—】及び第11回シモタカ・ジョースイ映像祭を文理学部3号館3305教室にて開催。第29回「東京」展ではゼミ生が本年度の5作品を口頭発表し、第11回上映祭では本年度の3作品を上映した。</p>	
研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	<p>2)2023年1月18日、文理学部の公式Webサイトに「社会学科『ソシオフェスタ2022-第29回“写真で語る：「東京」の社会学”展と第11回シモタカ・ジョースイ映像祭-』開催しました」と題する詳細な報告記事が写真数点と共に掲載された（後藤執筆）。</p> <p>3)2023年3月、社会学科「ソシオフェスタ2022」の特設サイトで成果発表を行った。</p> <p>4)2023年3月、『日本大学文理学部社会学科後藤範章研究室2022年度成果報告書（後藤ゼミブックレット2022）』を刊行した。</p>	